

文部時報

第1133号

昭和46年11月

青少年と文化……………大島 康正 2

▷座 談 会◁

青少年の文化活動の現状と展望…………… 11

(出席者) 林部 一二・栗原 一登・森 正

友井唯起子・杉本義智夫(司会) 吉里 邦夫

青少年と演劇……………浅利 慶太 36

地方における青少年の文化活動……………井上 武弘 41

青少年と文化財愛護……………宮野 礼一 48

青少年芸術劇場の実施について……………土生 武則 55

学校教育と芸術文化……………赤木 慎平 61

〔現地ルポ〕⑩

県民オペラ・サークルの活動……………田村 卓夫 68

〔随想〕

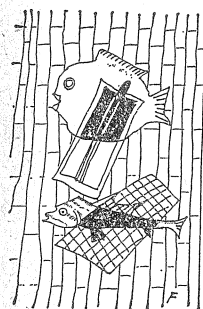
教え子のことなど……………伊藤 忠二 74

〔教育研究所紹介〕②

長崎県立教育研究所……………兼俣 恒治 78

〔連載第42回〕

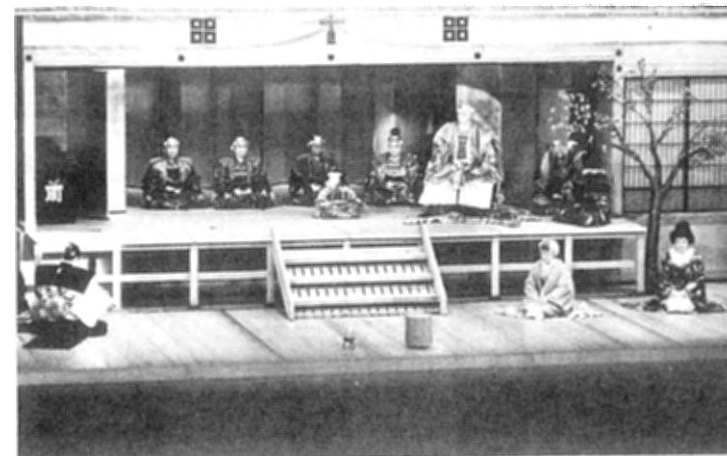
人物を中心とした広島県教育郷土史……………吉久 繁一 85



表紙 吉永房子

カット 須貝夫早子

▶文化庁移動芸術祭はなやかに開幕
芸術文化の振興のため、超一流の舞台芸術を全国各地に巡演させる文化庁移動芸術祭が今年からはじまった。〈写真は岡山市民会館での歌舞伎公演「盛綱陣屋」の舞台〉



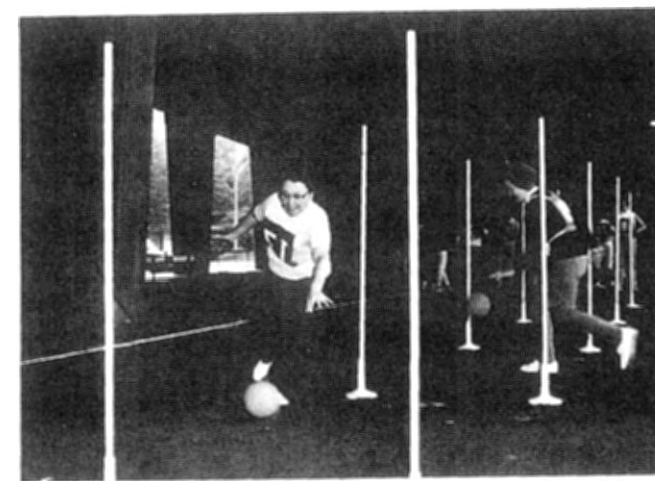
◀日教組の横枝委員長、文部大臣に会見

日本教職員組合の横枝委員長は、文部大臣に会見を申し入れていたが、10月8日実現のはこびとなり、三原、橋本両副委員長と共に文部省を訪れ、大臣室で文部大臣と会談した。



▶「壮年体カテスト会」開催

10月10日の「体育の日」、国立競技場の雨天体操場では、文部省等の主催で「壮年体カテスト会」が開かれた。当日は、あいにくの雨模様で、参加者の出足が心配されたが、あらかじめ登録された165名の男女が参加し、握力、ジグザグドリブル等5種目にわたってテストを受けた。



青少年の文化活動の 現状と展望

△ 出席者 △

(発言順・敬称略)

林 部 一 二

(国立社会教育研究所所長)

栗 原 一 登

(日本児童演劇協会会長)

森 正

(東京都交響楽団常任指揮者)

友 井 由 起 子

(日本バレエ協会理事)

杉 本 義 智 夫

(日本青年団協議会副会長)

(司会)

吉 里 邦 夫

(文化庁文化部長)

吉里 (司会) 本日お集まりの先生方は、それぞれの専門分野を通じて、青少年の芸術活動、あるいは文化活動、あるいは広い意味の文化的活動にタッチしていらっしゃる方でありますので、本日の命題でございます「青少年の文化活動の現状と展望」ということにたいして、ご経験を通じてきたんのないご意見、建設的な展望をいただければ幸いですと思っております。

本日の命題は、青少年の文化活動となっておりますが、私の考えでは、青少年と文化的活動というような形で、実際に青少年が行なっております文化的活動及びその中には、觀賞する活動も含めて、それから参加する活動ももちろん含め、また自分でおやりになる活動も含めた形で、あまりとらわれずに広い分野でお話していただきたいと思っております。

日本の文化というのは、およそほかの国と違いますが、鎖国の影響もあると思いますけれども、昔の伝統文化と——これももちろん外来文化がその鎖国の間に消化され高揚されて伝統文化となったものが多いんでございますが——その後明治維新というか、明治時代

になって入ってきた新しい文化の二つの流れがあり、またその中にもう一つ、とくに特有な日本文化の特質として、いわゆるお茶であるとか、お花であるとか、あるいはいわゆるわび、さびというような形の生活文化があり、この三つの流れがあるように思います。日本の文化を語る場合にそういう文化の特質をぬきにしては話ができないだろうと思いますし、そのことは要するに日本人の民族性という問題とのつながりを考えなくてはいかんと思います。同じように、いまから命題として出されております青少年の文化活動を論ずる場合も、現在の青少年のものの考え方というか、生活態度というか、俗なことばで言えば当世青少年かたぎというものの念頭において話を進め、分析したほうがよろしかろうと思っております。

なお、文化行政の面で、従来芸術活動、文化活動という面で行なわれてきておりますが、将来の一つの分野として文化行政の中にも、堅いことばでありますけれども青少年教育という面でのタッチのしかたが要求されてくるだろうと思っております。そのような観点からもこの命題をお取り上げ下さると喜

ばしいと思います。

さて、話を簡単な、ざっくりばらんな形で進めていただくために、先般政府派遣の「青年の船」に団長として乗り込まれて五十数日間、現在の青少年の中で生活、起居とともにされてきた林部さんに、その感想とか、青少年は何を考えておられるのか、船の中では、実際どういう活動が行なわれ、また悩みがどこら辺にあるのかというようなことを、ごく、とらわれずにご紹介いただいて、そこから辺から話を進めていけばよろしいんじゃないかと思っておりますがいかがでしょうか。

現代の青少年気質^{かたぎ}

林部 私が青年の船に乗りましたのは、今年の二月五日から三月二十七日まで五十一日間でした。この船は総理府が派遣する船でして、明治百年の記念事業として、佐藤総理の発意によってできたのですが、私の乗りました船は昭和四十五年度の事業ですが通算して第四回目。訪問した国、フィリピン、インドネシア、マレーシア、インド——これはマドラスですが——それから引き返しましてシ

ンガポール、中華民国——これは高雄へ上陸いたしました——の六か国を回って来たわけです。それでこの船に乗りました青年は、日本の青年が三百二十人、それに外国青年が三十人でした。これはわが国が招待いたしました、東南アジア巡航国の青年で、晴海からさくら丸に同時に乗り込んで、全く日本の青年と同じ生活、同じものを食べ、同じ規律で活動するという生活をしてもらいました。したがって船の中は非常に国際的な雰囲気がありました。そしていわゆる洋上大学とは異なり親善と、研修という、二つの目的、それは広い意味では教育の目的を持っておりまして、そういう雰囲気の中での生活であったわけ

です。



林部 一二氏

います。したがって、これは説得力があまりないという感じも少なからずいたしました。それはいまの青年の一つの欠点ではないかという感じもあります。

第二点は、いまの青年は折に触れ事に応じてとっさのアイデアといいますが、瞬間的なひらめきといいますが、そのような機智を持っているということ。何か一つの問題にであいますと、それに対しては、時間をかけることなく、とっさに功みにアイデアを提示します。たとえば、運動会、祭、外国青年との交歓会などの出し物やプログラムの考案などについては、実にすばらしい程のアイデアを出してくれました。これは大体、クラブ活動を基礎として考案し、実施しましたが、クラブはみんなで十五ございましたが、その中で六つが文化的な活動に類するものでございましたけれども、そういうクラブ活動での青年たちの行動や活動は実に活発でした。それから外国の港へ着きますと、外国のお客さんを招待いたしました、船内での交歓会がございます。これは向こうの青少年やその指導者を招待するものと、それから青少年関係の行政機関の人々、あるいは私ども青年の船を

受け入れてくれるところの民間団体の幹部、そういう人たちを招待するものと、二つのものがございしますが、ともに青年が、音楽、舞踊、手品、剣舞、郷土芸能などを披露し、あるいは外国青年との芸能の交歓をしたわけですから。その場合のプログラムの組み方とか、所作や芸の全体が非常にうまい。練習には、あまり時間をかけないのですが、まことにうまい。それからインドネシアにまいりましたときに、ちょうど赤道を越えましたので赤道祭をいたしました。この祭りの一切は青年達の手によって企画され進行されましたが、まことにすばらしいですね。ことに、竜王劇の構想は奇想天外で、私の今までに見たものの青年演劇の中でも秀逸でした。それをあまり時間をかけないで、二晩か三晩あればもうちゃんとシナリオを創っちゃって、振り付けもし、練習もして、りっぱに堂々とやるわけですよ。そういうところを見まして、とっさのアイデアと申しますが、時間をかけないでさつとやるところはなかなかうまい。ただその反面に、これも何か思いつきというようなことで、深みがない。何か物足りなさを感じる。これはもう少し練り上げ、または掘り下げると

動いたしまして、いくつかのものを感じ取りました。その中には、従来私が青年に対して持っていた印象といえますか、イメージといえますか、青年観と申しますか、そういうようなものを変えなければならぬような問題もございましたけれども、本日の座談会の主題にできるだけ即して申し上げますと、第一は現在の青年が自己を表現しようとする意欲があり、意思があり、またその勇気があり、かつその能力があると思えました。これは、どんなところででも物おじをしないでどんどん表現をする。言うことを言うし、またいろんな芸術的文化的な活動もする。この点は、従来既に現代青年の大きな一つの特徴であると言われてきましたけれども、私は、船の中で青年とじかに生活しながら、飾り気のない青年の行動をみることに、いっそうその感を深くしました。ただその表現力があるという問題のうらはらになりますけれども、それは何か十分に練ったところの表現力ではなくて、あるいは練習をして、きびしく鍛練をして出来上ったあるいは少なくとも鍛練しようという意思を持って表現するというのはなくて、何か行きあたりばったりの感じがござ

いう努力が足りないからだと思いました。です。それからほんとうにいいものをつくるためにはもう一歩頑張って練習をし、考えたらよかったものを、というふうにいることがしばしばでした。今日の青年には、一体に頑張り、根性というものが足りないと感じました。

まあだいたいそういう二つの面を感じたんですけれども、とにかく青年たちは非常に文化的な活動が好きです。クラブとしていたしましたのが、写真、器楽、これなどは楽団南十字星というふうな、名まえをみずからつけてましたね。(笑)

吉里 楽器は持って行っているんですか。

林部 ええ必要なのは、全部青年が持参いたしました。毎晩ではないんですが、一週間に一回くらい、食事が終わったあと演奏会をやりますよ。そこにみんなを招待してね。そしてまたダンスパーティーの楽団にもなります。それから茶道、コーラス、フォークダンス、これには日本舞踊が含まれました。しかし、バレエはちょっと指導者がいませんでしたので……(笑) 残念ながら友井先生などにも乗り込んでいただけたよかったと思うんですけど……。それからフォークソング。こういう

うクラブでの活動が非常に活発でした。なぜ、クラブ活動はこんなにも活発であるのだろうか。それで青年たちとも話をしたんですが、やっぱり青年たちは基本的に仲間を求めている。その仲間づくりが、この文化的な活動によってできる。そこにクラブ活動に参加する現代青年の心理を見る思いでした。

栗原 「青年の船」の団員の年齢はどのくらいですか？

林部 年齢は一般団員が二十歳から二十五歳。班長や、通訳をかねた副班長は、二十六、七歳から三十五歳くらいまででした。そのほかに管理部……これは庶務、会計、生活管理などに当たる職員、それから団長、副団長以下で教官が乗船しました。団員諸君は、とにかく仲間を求めている。そのために一番いいのはやっぱり文化活動だと言っておりまして。文化活動は純粋な活動であって青年たちの心の触れ合いというものを求めることができるということをおっしゃったのが、非常に私の印象に残っています。

文化活動と個人の趣味・娯楽

してその楽しみの中に非常に彼らがリラックスした形の中で受け入れている。それがまたほんとうに文化という形の中で、われわれが呼んでいいものか。そういう青年の表現意欲は多様にあるけれども、この表現意欲が多いということは、私たちは大いに賛成しなくちゃならないけれど、ただ、いま日本人、新しい世代が解放されたという形の中で、非常に自由に泳いでいるというのが、われわれの目につくところであって、これを一つの文化運動とか、芸術運動とか言っているかどうかというところで、私たちにはまだ疑問を感じるわけなんです。



栗原 一登氏

ですから、森先生の領域ですが、のど自慢に出たとたんに音楽家になったというふうな気持ちになるのも、困ったことだし、芝居を

吉里 いま林部さんから体験談と分析があったわけですが、その中に私として感ずるところは、船に乗っていらっしゃる方はどちらかというと、日本の青年の中で選ばれた人たちだと思えます。しかしながらそういう方であっても、いわゆる長所があると同時にいまお話承った、つね日ごろ私も感じていいる現在の青少年に対する一つの私たちの危惧が出ていいると思えます。たとえば瞬間的な発想が非常に多い。それをこなす力はあるけれども、ものを掘り下げ、分析し、仕上げて行くというのには欠けておるとい……これは現在の青少年の、ある意味での通弊であって、それはなぜかという、やはり書物から来る分析でなくて、テレビとか、瞬間的映像とか、そういうものでなれてきてしまっているところにもあると思うんですね。ですから文化が与える影響というものの一つ大きなテーマになるだろうと思うんです。そこで、演劇の問題も出ておりましたけれど、栗原先生、とくにアマチュア演劇とか演劇協会とか、そういうようなところでの関係で、演劇を通じての理想と、それから、青少年に対する批判があるだろうと思うんです。簡単に

やっても何か一二度舞台に立つと、すぐに芸術家気取りになれるというの、私たちの非常に困ったことだし、なぜ自分たちはそういうものをやらなくちゃならないかというふうな根源的な掘り下げがなければ、文化という形に近づいて行けないんじゃないか、ただ彼らは遊びが、昔の時代の人たちに比べて、非常に幅が広がっただけじゃないかといったような感じがするんですがね。どうですか、音楽のほうでは。

森 ぼくもいま、栗原先生と同じことを感じてたんです。私も音楽の場合になりますと、音を出すという技術が、それを一生懸命練り上げて、専門教育を受けて来た人間だけのものではなくて、いまの青少年のいわゆるアマチュアが、自分で趣味でやっているにもかかわらず相当高い技術をもっているようになってきている。技術だけで比べてみると、だんだん専門家としての差が縮まってきている。片方は一生懸命練り上げるための訓練をしている。片方は単なる趣味で余暇にやっている。本質的にスタートが違いの、だんだん似てきちゃっている面があるんですね。ことにコーラスなんているものを比べてみます

と、近ごろはいわゆる、アマチュアのコーラスでも、ほんとうに優れたコーラスがありまして、われわれ専門家が聞いて敬服するのがたくさんあるんです。その技術の面での差というのは非常に少なくなってきた。



森 正 氏

ただ一つ、そこでやっぱり違いますのは、技術は差が縮まってきているけれども、本質的、何かそこから呼びかけられる、あるいは訴えかけられるものの気迫差というのはやっぱり、アマチュアと専門家の間にあるんですね。必ずしもいつも専門家のほうが深く訴えるとも言えないんですけれども、何か一本肝心なところが抜けている場合が、アマチュアのそういった演奏によく出てくるんです。だから技術だけでなく、もっと本質的な掘り下げあるいは練り上げというものを、目指し

て行かないと、ほんとうに上っすべりな音楽の演奏ということになりかねないと思いますね。

栗原 コーラスなんていうのは、地方でもいい指導者がいるんですね。この前も山形県でおかあさん方のコーラスグループ……山形県というのは非常にコーラスが盛んらしく、聞いていらした方々も、あれが人の子の母であり、忙しい主婦でありながらときどき集まってあれだけの力を出したのかというので、それは私たちが非常に感動しましたね。

森 やはりそういった有力な指導者、あるいは指導者群がいらしたところというのは、ほんとうに伸びるんですね。ただやっぱり近ごろむずかしいのは、昔は字義通り指導者でもよかったわけなんです。ところがいまは単に機関車みたいにぐんぐん引張るだけではなくて、ときには後ろに回って押すほうとか、あるいは知らん顔して下から持ち上げて運んでやるというふうなことが、たいへん必要な気がするんです。引っ張るばかりだと逆に何だかある種の抵抗……ことに近ごろの若い連中は引っ張られること自体に抵抗を感じることがあるようで……。だから指導者と

いうことが、端的に示す意味だけではちょっと足りないような気が最近ちょっとしてきてるんです。

青少年の情操教育としての文化活動

吉里 いま森先生のおっしゃることのなかに三つほど入っていると思うのですが、最後のほうから言いますと一つは指導者のあり方の問題、それからいま一つはいわゆる青少年がやっている、あるいはアマチュアがやっている活動と、それからほんとうの芸術家、あるいはプロの活動との接点というか、違いというか。そういう問題が出ていると思うんです。まあ私もときどき悩みますことは、いわゆる文化事業というか、文化行政の面で取り上げる場合に、いわゆるアマチュアの活動……要するに文化の幅、裾野を広げていく観点と、それからピークを立てる観点と、この二つがありますが、その二つがどういうふうにつながるか、つながらないでいいのか。

簡単に言いますとアマチュア活動はアマチュア活動としての目的がある。プロはプロとしての目的がある。この二つがつながって行く

のか、つながらないでもいいのか、ということに非常に悩みをときどき持つわけですね。いま森先生のお話の中に若干そういう問題が含まれておるんですが、そこら辺を掘り下げて行きますと、これは何日議論しても解決できないことですけど、そこら辺は多少触れながら、友井先生、とくにバレエを通じて、子どもさんの教育とか、それからいわゆる裾野を広げる活動と同時に先生自身は有名なプロでありますし、そのプロ活動としての面からくる要請という問題と二つお持ちだと思っております。それから先生がいつもおっしゃっていることですが、いわゆる芸術文化を青少年に観賞させ、あるいは青少年に参加をさせるということは、いわば目的をさらにせざるを得ない形ではあるけれども、非常にすぐれた青少年教育である。これ以上の青少年に対する情操教育とか、いわゆる教育の効果ははかり知れないものであるというふうにおっしゃっているわけですね。そこら辺を含んで先生のご意見、展望あたりを簡単にお話願えませんか。

友井 私がバレエ人の立場から申し上げますと、私たちの立場はいま日本に国立劇場……

……いわゆる近代文化のための国立劇場もないし、国立のバレエ学校もないので、一応私たちは教えるほうの立場と、それからまた私たちがいわゆるプロとして、お見せするほうの立場と、両方をかね備えているわけです。教えるほうの立場から言えば、一般の教育は年々エスカレートして来るし、実に日本の教育は優秀だと言われている。その反面情操教育という面が、おきざりにされている。教育ママはもう学校へ行っている間は、子どもに過酷なぐらいに、勉強せよ、勉強せよというふうな立場で突き進んで行く。いったい教育ママは子どもに何を要求しているのかと、私は言いたいと思うぐらいいのことに直面する場合がよくあるんです。それで心を育てる……

……たとえば女性なら女性が一般社会に出てから、ほんとうに情操豊かな女性に育ってもらうための心を育てるということは何か。それはやっぱり芸術家の使命だと私は思うんです。芸術が心を育てるのに役立つのであれば、せめて学校の中に、もう少し情操教育を加味したものを入れてほしい。たとえばクラブ活動なども、ただ生徒が自分たちの好きなグループに入ってやっていて、たまたま学校

にいらっしゃる体操の先生が、バレエに限れば相談役になっているとか、お手伝いしているという程度ではなくて、そういうときには専門家を招いてその生徒たちのやりたい意欲に、もう少し私たちがお手伝いできるような……。バレエ人もたくさんおりますから、そういうところから御希望があれば専門家がお手伝いできるような場も広がってもらって、たとえばクラブ活動の中でバレエならバレエを取り上げて、洋舞なら洋舞を取り上げていけるのなら、そういうことももっと積極的に芸術家の立場で援助したいとも、私たちは考えています。



友 井 唯 起 子 氏

それからまた、お見せするほうの側から言えば、視聴覚教育の一環としても、移動芸術祭というものが、こしから開催されるように

なって、年に一回秋のシーズンには回るようになりましただけで、これは一般大衆のものとして考えていいと思うんです。ただで青少年のための移動芸術劇場というようなものも企画していただいて、定期公演のような形で年に四回ぐらい、オペラとか、バレエとか、オーケストラとか、演劇とかそういうようなものが地方と中央と、直結していいものを見せていく、心豊かにするものを見せていく。そういうような方法が必要なのであって、これをしちゃいけない、あれをしちゃいけないというようなことではなく、黙っていいものを見せ、そして世の中の美なるものと、醜なるものとをせんに自分の心で見分ける力をつけていってあげるといふようなこと、そういうこともやっぱり芸術家がしなくちゃならない仕事じゃないかと思うんです。

費用の点やいろいろな面を考えると、西日本では、たとえば関西の有力な団体がこれに派遣されるとか、東日本では東京から派遣されるとか、そういういろいろな方法論も今後、検討する余地があるかと思っています。その他これは外国でよくやっていることですけれども、自然の環境に親しみながら、夏のシ

ーズンの野外活動の中に、野外演奏会とか、野外バレエとか、野外オペラとか、そういうようなものを、自然に親しみながら観賞する。そして観賞したあとで自分たちも、そういうものの主演者や指導者の人たちとディスカッションしながら、そしてその人たちに指導してもらって、歌の一つも歌い、踊りの一つも踊り、そして演劇の一部分も体験してみるといふようなことも、何か文化と直結していつて青少年を育てることに役立つんじゃないか。何か私、非常に多角的にいろいろと考えてるものですから、まとまらないかも知れませんが、そういうふうと考えております。

青少年の悩みと希望

吉里 具体的な提言が出ておりますが、まあとて、時間があればひとつひとつお話を承ります。いまの中で、私もどもがやっております仕事にも触れておられるのですが、移動芸術祭とか、青少年芸術劇場とか、いくつかの試みはやっておりますが、そういう試みを今後拡充して行って、全国的な網を張って行

きたいと思うのです。私つねづね行政官として考えておりますことは、文化庁ができて、それぞれ文化的な行政というのは、昔に比べると多少ちみつになっている。同時に反省いたしますことは、文化行政の側面と、いわゆる社会教育といわれておる側面が、違うといふふうにとられるとたいへんなことで、これは一緒になって幅を広げていかなきゃいかん。そのためには文部省の中でも、企画の段階からよく相談をして行かなくてはいいかんだらうと、実は思っているんです。そこら辺を、今後もしやりますが、どうでしょうね。日本青年団の方として、青年団だけではなくて、いわゆる青少年という意味でおとりいたしたいと思いますが、わりと文化的ないろいろな催しというのは、地方でもふえてはきておりますが、その受けとるほうの青少年として、自分たちがやるものと、見るものと、二つに分かれるだろうと思っておりますけれども、どういう意識で見、どういう意識で活動しているかという……いままではどちらかというと、指導者の方々のお話ですから、今度は受ける側（という失礼ですが）の立場でひとつご意見を承ってそれからまた話を進展させてい

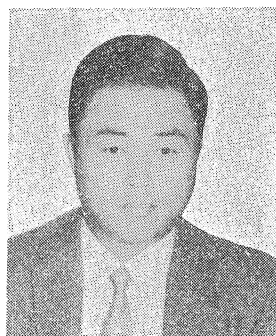
ただけがいいと思います。

杉本 私のほうの青年団の組織は、最近いろんな面で弱くなったと言われておりますし、とくに、都市化が激しいために、そういう組織の中に入って活動する層が非常に減ってきた。若い人はふえているのですが参加する人はだんだん減ってきたというところで、とくに青年団の場合には、スポーツ活動がはなやかなんですけれども、文化といわれるような分野でも非常に幅の広い活動をやっているわけです。とくに栗原先生には毎年全国の青年大会で、演劇部門の審査をしていただいているわけなんですけれども、われわれのほうは、きょうお集まりの先生方のような専門じゃなくて、結局自分たちが参加している。やることによって自分が専門家になろうという形でやるのではなくて豊かな人間形成とか、情操教育とか、仲間作り、人間の連帯意識とか、豊かな青春時代を送るといった形のものにつなげるような、非常に学習的な面が強いんです。とくに郷土芸能についても非常に……これはとくに地方ではその青年が受け継いで行かないと、いくらかお役所がらんばって、掛け声を掛けても、なかなか

守りきれない。もちろんそのほかコーラスだとかアマチュア演劇とか、それから体験の発表であるとか、生活・文化的な手芸の展示会とか、美術展とか写真、いろんな形でやっているわけですけども、一番残念なのが、やっぱりそういう全国の催しがあるから練習するんだといったやや形式的な感じが、参加する若い人たちの中に、傾向として徐々に広がっている感じもみられることです。

吉里 大会用になっちゃう。

杉本 ええ、そういう感じがだんだんと出てきている。われわれは専門的な人を育てるのとは違いますので、その練習の過程でも人間関係とか、青年の連帯意識とかいったものができますので、演劇そのものがへたくそでも、そこに至るまでの過程が非常に大事なものですから、それなりに意義はあると思っています。しかし、たとえばフォークソングをやるとかというグループはあちこちにできるんですけども、何か全般的な情操教育とか、いま司会者の方がおっしゃった社会教育的な感覚というようにことをよく理解しながら、人間形成に役立てていくというようにない感じが、だんだん弱くなっているんじゃない



杉本 義智 夫 氏

かという気がするんです。

そういう意味で、われわれのほうからいいますと、実は地方によい指導者が少ないんじゃないかという気がするんです。とくに演劇などでは、いい演劇を持ってくる県、あるいは県の中でも、そういう市町村が限られてきているような感じがするわけです。だから、去年全国大会に出て来たところは、またことしも出て来るというような傾向が、だんだんとあるような気がするんです。そういう意味では、やっぱり地方のほうへも、いろんな分野のいい指導者を育てるような工夫が大事なような気がするわけです。

栗原 現在の青年の文化活動の現状というふうな点に立ちまして、文化活動というのは何だろうか。私たちが文化と言うのは、まあ

文明と文化というようなことばがあるが、文明というのを一口で言えば、便利にするというようなことだったから、文化というのは、物質、精神、そういうものを豊かにすることじゃないかと思うんです。そして、豊かにするといっても、たとえば離れ島でギターを一生懸命弾いていたからといって、これは文化ではない。文化というものは、人間社会や、社会生活に一つの価値として還元される性質を持っているなければ文化とは言えないと思うんです。ひとりよがりであるというのではなくて、社会生活や、家庭の中でもいいから、それが価値としてはね返ってくるものが文化である。だからいまお話のあった中に、何か非常に楽しんでやっている。それは一つの情操教育として楽しむというような面はいけれども、その楽しみがどのように、社会に価値として訴えかけられているか。それが私は文化活動という名に価すると思うんですね。そういう意味からいうと、非常に多様な青年の趣味、それから先ほど言いました娯楽とか、そういうものはしているけれど、われわれはそれを文化として評価していいものか。それが地域の中でどう地域の人に訴えかけている

か。そういう点に立って現状を見てみると、たとえば私たちの専門の演劇で言えば、非常に高度なもの、やれもしないような芝居だけをやって、周辺の人たちから孤立してしまっただけで、そして分散したというような例もあるんですね。私はその地域の人たちに見せるという場を持つことが、創造すること、創造したものが一つの価値として地域の中に広がっていく。そういうことがどう定着しているかというのが、現状を見る一つの目になっていくと思いますね。

かという面から押さえていかないと、ここでも何かをやっていることで文化が豊かになってきたなどと、甘い考えをしていたら、方向を誤るんじゃないかというような感じがしますね。

吉里 器用にはなったが、必ずしも深みはないと思うんですね。

栗原 私は、いかに彼らのいうような芸術的な活動をやって、それは芸術活動とは思っていない。

芸術活動をするのは、ほんとうのプロ、ほんとうの芸術家が一つの運動としてやることであって、彼らがやるのは一つの文化的活動という中に包含して、それからこれがプロになるから、自分で、森さんのお弟子さんになったり、友井さんのお弟子さんになって、ほんとにやればいいことで、アマチュアとしてやる限り、それはどこまでも文化価値の体系の中で自分が動いていくという……指導者もそういう目をもって指導しなくちゃいかんし、参加するほうにもそういう自覚を与えないと、文化ということにはならないんじゃないかと思えますね。

青少年の文化活動における教育・訓練・指導

吉里 冒頭、私が申し上げた、いわゆる今日のテーマを「青少年と文化活動」あるいは「青少年の文化的活動」と申し上げたのは、実は私自身が悩んでおるんですが、私の仕事に両面あるわけで、まさに文化普及家と芸術家があることで、これは人によっては私の考えはまちがいだと言う人もおるのですが、いわゆる芸術行政と文化行政は違う。観点が少し違う。芸術行政という……いわゆる芸術活動というのが、いま栗原先生がおっしゃったようなものであって、文化活動なり、文化行政というのは幅を広げていく。



吉里 邦夫氏

ことばを変えれば手段として演劇をや、音楽を通じて青少年が幅広く豊かになり、それがまた青少年がやっている文化活動を通じて、社会の人たちが青少年を見直し、また青少年と対話ができる。そういうところが私のねらいなわけですね。そこら辺の本質的な問題を掘り下げていただきましたので、本日はどちらかという、いわゆる青少年がやっておる。いわゆるプロになるための修業というところではなくて、後者のほうにねらいをおいて、それぞれ先生方にお話いただければ、非常に幸いだと思うんです。

森 ちょうどその修業の話ですが、音楽の分野で私が感じていることをちょっと申し上げたいんです。その修業の段階では、ほんとうはプロもアマチュアも区別はないはずだと思ふんです。というよりも、いかにそれが趣味であれ、プロがやるのと同じような訓練というか、あるいはきびしさというか、つまりいいかげんな訓練をアマチュアだからしてもいいというわけは絶対ないと思います。やっぱりその技術を習得するための訓練というのは、プロであれ、アマチュアであれ、同じ精神でやっていかなければいかんと思う。た

だプロのほうにそれにつき込む時間がたいへんたくさんである。それからあらゆる生活が全部それを基盤にしている。アマチュアの場合には、その時間がたいへん短いであろうし、それからその人自身の生活そのものは、ほかの時点で動いていく。その区別はあると思うんですが、訓練をする場合においては、あるいはそういう勉強をする場合においては、全部同じはずだと思ふんです。その点で何か、青少年だけに限らず、一般的に妙な差をつけて考える風潮があるのが気になるんです。

栗原 それは演劇でも、新しい自由劇場運動などというのは、サラリーマンが寄ってやったということですから、その点は全くそのとおりだと思います。ただ私は訓練という過程ではなくて、何か一つのものを表現しその喜びがほんとうの芸術的なものでなく、こちらが見たら顔を伏せたいもののようなものをやっているなら、いかにも芸術家気取りをしているとか、そういうことがやりきれなくなってくるわけなんです。

森 そういうわけですね。

栗原 謙虚さを通ずということとは必要だ

し、それから自分たちはやはり、アマチュアだという誇りを十分持っていていいと思うんですね。胸を張ってやっていいし、それから、青年、少年みんながそういう芸術分野のいずれかを選択する権利があると思うんです。私は音楽が好きだ、私は踊りでいい、私は絵を書こうとか。だから自分が選んだことに對してはやはり、忠実にやっていくことが、いい意味の青少年の青春の燃焼だと思っんです。だからそこに入った以上は何か、それを通してやるだけの気がまえたときに、文化へ通じる一つの道が開けるんじゃないかと思っいます。小器用に形だけ覚えて、人の前でちゃらちゃらやってみようというだけでは、どうもしょうがない。そういう傾向が非常に強いんじゃないかということです。

友井 私、私もバレエのほうで考えることがあります。私のところでは小さな幼稚園児から、二十四・五歳まで教えるわけですから、結局芸ごとでも何でもそうですけど、初心を貫くということ、その芸術の技術を身につけるだけではなくてその精神が大事なんです。だから「こうしてたくさんさんの生徒がいるけれどこの中であなた方はみんなプロにな

るとは決して思わない。」これはおかあさま方を集めてよく言うのです。だけどやっているからには、「あなた方はほんとうにきびしい気持ちでこれを積み重ね、そしてきらびやかな舞台だけを見て、すぐへ白鳥Vを踊ったりへ眠れる森の美女Vを踊ったりしたからといって、それがあなた方が文化的に成長したわけでもないし、おかあさま方もそれで満足しちゃいけない。バレエを学ぶことによってその心の中にある芽を育んでいって、少なくとも小さいときから、大事な青春時代を通じて一つの芸ごとを貫いたということが、あなた方が一般人になったときに、たとえ専門家になれなくても、やっぱり芸術によってみがかれた何かを身につけているんだ、芸術を学ぶことによってみがかれなかった人よりもやっただ人のほうが、次の世代の子どもに對する目のかけ方、そういうものまで違って来るんだというような自信をもった人に成長してほしい」と。私は、バレエに限らず、他の姉妹芸術を学ばれる場合にも、生徒やおかあさま方もも強靱したいと思っ、そういう気持ちで言っているんです。

青少年が文化活動を通じて求めているもの

林部 私は、先生方のお話を承りながら思うのですが、青少年の文化ないし芸術活動という観点で考えてみると、文化性というものの、あるいは芸術性という——純粹な意味で——そういうものがそこにある。いまの修業の問題にしても、心がまえの問題にしても、あるいは練習の問題にしても、それだけのきびしさを持たなきゃならないということはあるんです。同時にもう一つは、青少年の活動ですから、青少年のその発散しようという気持ちを発散させてやるというのが一つの、青少年の文化活動のあり方ではないだろう。か。そういうことから言いますと、文化性と教育との関係になってくるわけですね。それでその立場は、栗原先生が、比較的、文化というものをシビアにお考えになる。これは賛成なんですけれども同時にこれを、実際の青少年の活動の現象としてその中におろしますと、多少これはゆとりをもって考えてもいいではないかという気がしますが、その点はいかなるものでしょうか。

栗原 私は趣味けっこう、娯楽けっこうというふうなことで、ただそれを一括して文化活動という呼び方をされる、その危険さを言っただけであって、ひとりが趣味を持つということは非常にいいことで、娯楽の幅が広いというのもいいことで、それから青年が楽しみでやることだっけっこうなことだと思っています。けれどもそういうことをすべて芸術活動とか、文化活動と呼ぶ、そのことを申し上げているのです。もしこれを厳密に言えば芸術的方向についての活動とか、文化的な意味での何とかいうとらえ方をするのならないのですが、そのことをすぐ芸術活動、文化活動という言い方をしないで、もしここで与えられる主題に添えば、文化活動という場合は、ぼくは文化活動はどうなっているかというところがきょうの話題になると思っただけです。だから一般的にそれはけっこうなこと

す。しかしそういうことをわれわれが統稱して文化活動という言い方でいいかどうかというところの、一つの問題提示をしたのです。ほんとうにいまの青少年たちが、くだらん週刊誌を読みふけるよりも、ギターをかき鳴らして本のかたわらにすわって歌っている。そのことだっけ私はいわゆる精神的な豊かさということだっけたらけっこうなことであって、それ自体は否定しないし、おそらくそれが現状じゃないか……。

林部 よくわかるんですが、ここでは文化活動、芸術活動そのものを論ずるものではなく青少年の文化的活動をどう展開するかどうかというのを主題としていっていると思っます。そこで一つの方法論として、最初から文化とか、芸術とかという一つの崇高なものを望んでいても、なかなか入れない。したがってそれが文化であるのか、芸術であるのかかわらないような混とんのところから入っ行って、次第にそれを昇華する。高めていくという一つの生き方はたしかにあると思っます。

栗原 それは認めますね。ただきょうの雑誌のテーマが、文化活動ということで言われるから、ぼくは文化活動は論じない、だから

青少年をどのようにしてそうするかといったいまの林部さんがおっしゃるような話題になっていくと思っます。きょうのテーマに添おうとするために、文化活動という意味を分析してみたわけなんです。

林部 ついでですので申したいと思っますのは、青少年の教育のサイドからみまますと——私はどうもそういう能力がございませんから——青少年と文化的活動あるいは芸術的活動の目標なり、ねらいということについてでございます。青少年の文化的活動や芸術的活動にはいくつかのねらいがありますが、結局そこに文化性、芸術性というものと、一つの教育性というものが現実の青年の活動の中に融合されていくものと思っています。いわば二つの極、文化性、芸術性と教育性というもののからみ合わせが出て来ると思うのです。その一つはやっぱり情操の陶冶、情操を豊かにするというようなこと、これはどうしてもねらわなくちゃいけない。これは学校教育もそうですけども、社会教育としての青少年教育においてもたいへん必要なことだと思っています。それはまあこういうきしぎしした時代になってきましたから、人間性の回復と

いうようなことも含めていかなければいけない、ということももう異論がないことです。

それから二つ目はさっき栗原先生も言われた、創る喜びというもの——青年や少年は、これに非常に興味を持ってるわけですね。われわれもそうですけれども、それ以上に少年や青年が非常に興味を持っている。船の中でも体験したけれども、そういう創造の喜び、創造性というものを何とか育てていく。

三番目は、現在の青少年にとって一番大切だといえる仲間を作ることです、文化的活動はだんだんに昇華していかなくちゃいけないんですが、ある段階では仲間を作るための一つの手段ですからね。音楽をやるなり、あるいは舞踊をやるなり、ということを仲間作りをする一つの手段にしていこう。仲間を作らなければ寂しくてどうにもしようがないんだというのがいまの青少年……とくに都会の青少年なんです。孤独な青少年に生きる喜びを与えるために、そういうものを一つの手段にするという面もあっていいんじゃないか、ですから仲間作りということを目標にして、むしろ文化的活動や芸術的活動をやると言っ

てもいいかもしれません。

それから生活に潤いということとは今日しまりに言われていることですが、そのために何か一つ特技を身につけることが必要である。特技を持つべきだということです。「青年の船」の中でも、青年たちは男女ともに自分たちはたとえば日本舞踊なら日本舞踊でも、お茶ならお茶でも、あるいは器楽なら器楽でも何か一つ、ある程度自信を持てる特技を持ちたい。そのことが生きる喜びに通じ、自分に人生に対する、あるいは仲間との交際において自信を持たせる。というようなことを言っておりましたが、そういう特技を一つ持たせるといふような、そういう面、これも青少年の文化的活動という概念の中で許されているものかどうか。いかがでしょうか。

森 全部それはそうだと思う。ぼくはやっぱり広い意味で、文化あるいは文化的活動というものを、幅を広げて大きく考えたいと思うんです。だけど現実には習い始めのギターをポロンポロン、木蔭で一人でやっているぶんにはいいけれども、アパートの一部屋でポロンポロンやってくる……。まだへたでも自分自身は楽しんでいられるけれども、まわりの人

は迷惑でしようがない。あるいはピアノを朝から晩までエチュードばかりがらがらで、練り上げるつもりで訓練しているけれども、隣近所はもうほんとに大迷惑である。

ある種の公害でさえあるわけですね。こうなるとその人は文化活動のための訓練をしているんだけれども、そのためにたいへんな犠牲をほうぼうにしているみたいなことが、現実にはよくあるわけですよ。そういう場合にやっぱりぼくは、ある程度はなるべくまわりがまわって理解してあげてほしいと思うけれども、その度合いというのは、たいへんむずかしい。それにしても、そういう訓練をするときに、本人が自分を甘やかしていいじゃないかと思うんです。いくらアマチュアでも、ぼくがさっきちょっと申し上げたかったのは、アマチュアだということによって甘えるんでは、これはもう文化はおろか、レジャーでさえないと思いたいんです。情操の問題にしましても、うまくなることによって情操が豊かになるんではなくて、うまくなるための訓練なり、勉強している間に情操というものも豊かに育って来るんであって、だからそれこそプ

ロセスが大事なんじゃないかとぼくは思うわけです。その面ではもうプロもアマもないことだし、それからそれを助けるのはやっぱり指導者であり、まわりの先輩であり、同輩であり、そういった連中がそれをじっとあつたかく、しかも厳正に見守ってやってやらないといけないと思います。いまの若い人たちのことに音楽の面では、積極的な、われわれの時代にはなかったような、からだ全部で音楽を受け止め、自分のからだの中から自分の音楽を出すという風潮が、非常に盛んになって来て、とてもいいことなんですけれどもたった一つ先輩づらして私が心配なのは、その表現がつねに適切かどうかということなのです。やっぱり芸術であれ、文化であれ、趣味であっても、娯楽であっても、表現ということについて、一番大事なことは適切さだと思うんです。その適切さが欠けていけば、これはひとりよがりやで公害にさえ通じることだと思ふんです。だからその適切さを得るためのきびしさというものを、ひとりひとり、めいめいが持つてなきやいかんと思うのです。そのきびしさというのはことばで申し上げると、えらくむづかしいようで、芸術を、一昔前の

芸術至上主義みたいなことに受け取られると、たいへん困るんですけれども、そのきびしさというのは、毎日車を運転していてぶつかけちゃいかん。かすっちゃいかん。信号を守らなければいかんというきびしさと同じことだと思ふんです。決して特殊な、厳格な、齋戒沐浴してというきびしさじゃなくて、車の運転でわれわれがつねに、自分自身に要求しているきびしさと同じものだと思うんです。車だってちょっと油断すれば事故になります。事故をやっちゃいかんと、一生懸命自分で自分にきびしくしなければいかんわけですよ。そういった意味のきびしさというものは、娯楽であれ、レジャーであれ、趣味であれ、そして芸術の訓練であれ、もって持っている必要がある。そしてそのきびしさを指導者、もしくは指導的な立場の人が、やっぱり引っ張るだけじゃなくて、見守ったり、キャリーしていったらなければいけないんじゃないかと思ふんです。

栗原 ルールがあるんですね。

正しい指導とは

友井 森先生のおっしゃっていることは、

パレエ教育の場面でもそのまま当てはまりますね。私が言いたいのは、今の青少年はまだある意味において甘やかされすぎていると思うんです。だから、学校の先生はどちらかといえば、昔のようにほんとうの意味のきびしさというものはもってないし、むしろ中には生徒のきげんをとったり、顔色をみたりしている先生も非常に多いということを父兄からも聞きますし、また、母親も父親も、昔のような、ほんとうに自信をもって子どもに、そういうことに当たっているかといえば決してそうじゃない。だから「先生この子は、むしろパレエの先生のところへ行ったらほうが、よく言うことを聞くんですよ。」とか、家庭内のことでも、「この子は野菜を食べないんです。肉ばかり、好きなものしか食べない。野菜を食べるように言ってください。」とか、たとえばそういう例まで出てくるわけですよ。

森 なるほど、それはわれわれも同じです。

友井 そういうことは何かといえば、子どもとそのパレエの先生、自分が一番今習いたい、好きだというパレエの先生と、子どもの気持ちに密着しているからなんです。それで

結局ノートの上で整理されたこと、本で読んで理論づけられたことを教えるんじゃないくて、自分の体の中に蓄積した経験によって、

自信をもって教えるから、そこに愛情が生れるわけです。子どもが受け止めたかと思ってる欲望と、先生がもっている愛情がびたっと一致するわけです。そういうときにほんとうの、いわゆる文化教育が生まれてくるんだと思うんです。そういうことをよく父兄からも聞きます。

栗原 今のおかあさん方のきびしさというのは、学校から帰ったらピアノだとか、バレエだとか、無理じいさせるあかあさんもあるのではないのでしょうか。たとえば、ある小学校の一年の男の子の次のような詩があります。

ぼくがかえってくると、
いつもピアノをやらされる
あそぶことばかりきにするので
なかなかひかれない
こんなピアノやめたらいいね
ひゃくてんとったら
やめさせてくれる

いえでしたらピアノなんか
ひかなくていいや

やらされるとか、「家出」とかおたやかでないですね。これでは子供に精神的にはちっともプラスにならないではないでしょうか。

友井 それは悲しいことねえ。

栗原 小さい子どもが家出すると言ってるんです。それがおかあさんのきびしさなんです。自分はひけもしない、聞きもしないで、とにかく一時間やらせる。時間さえ自分が厳格に言えばおぼえられるというふうな、そういうのをきびしさとしてしているわけです。

森 ところがそういういわゆる才能教育とか幼児教育というのは、音楽のほうで大変盛んになったんですけど、幸か不幸か、父兄がそういう文字どおりのきびしさを子どもに与えている場合のほうが、子どもの伸びるパースペクティブが大きいんですね。そこに問題があると思うんです。もちろんほとんどの子どもが、ある時期大変反抗するんです。反抗してバタッとやめちゃった子どももありますし、それを何とか乗り越えて泣く泣くやってくるうちに、いつしか、フッとそれがおもしろ

くなったり、身に付いてきたりという例もあるんですよ。

友井 目ざめるときもあるんですね。

森 でそれから、ぼくは今栗原先生のおっしゃったひかされるという、そのことには大変反発するんです。そういうふうにはしたくないと思うんです。だけど、ある時期は、何かの方法でぐっと子どもを引っ張ってやらなきゃならないということも否めないと思うんです。

吉里 だいいじなことは、そのときの母親にしても何にしても、いわゆる指導者というかコーチというか、そういう人の心掛けの問題でしょうね。

友井 根本的なものを見失っていないかどうかの問題になってきますね。

吉里 見失ったきびしさであっては大丈夫でしょうね。友井先生あたりもきびしくやられてきてこまできたんでしょう。(笑)

友井 そうですね。やっぱり何度もやめたくなったときもありましたからね。

吉里 そこらへんはやっぱりむずかしさですね。かねあいの問題というか……。

林部 先生方のお話を聞くと、たしかにそ

うですが、いうならば人間のあり方の学習、人間のあり方の探究というようなものが、ほんとうの文化活動なり芸術活動の奥に潜んでいるわけですね。

森 中になきゃいけない。

観ること、観せることの意義

林部 文化活動や芸術活動の中に人間としての酷しさがあるということ、その酷しさの出し方は、いろいろ対象によって、あるいは物によって違うだろうけれど、その精神は貫いていかなきゃいけないということですね。

ところで、今先生方のお話は、もっぱら文化活動なり美術活動をするほう、実際に活動に参加するほうですが、受身のフォロアーのほうのつまり一般大衆のほう、それを見るほう、それは観賞ということになるだろうと思いますが、それもやっぱり広い意味の文化活動の中に入れて考えるべきだと思うんですが——そのほうをどう進めればいいのか……。

吉里 われわれのほうで考えると、友井先生と結論は同じになるかもしれませんがレベルを落とさないで、いいものを見せる、ある

意味でわからなくてもいい、けれどもいいものを見せるということ、で終始してきているわけで、これがある意味じゃ、もちろん小さな子どもにうんと高いものをぶつけていいのかわいのかという反省があるのかもしれないが、ともかく少なくとも物心つき、青年といわれ、あるいは少年から青年に移る時期まできたものに対しては、レベルを落とさずに高いものを、生のままぶつけていく。これが青少年芸術劇場のねらいであり、移動芸術祭のねらいでもあるのですが、青年団としてはどうですか。(笑)

杉本 たしかに見るほうだといいいものを見たいと思いますし、いいものを見せてもらわなきゃ、いい加減なものじゃ困るわけなんです、ところがいいものというのは、都会にいればいつもお目に掛かれるんですが、なかなか地方では、見て「ああ、よかった」と思うような(見る力もないかもしれないけれど)機会が少ないように思うわけです。だから、われわれの立場で考えるのはむしろ——また話を戻すようになるのですけれど——参加するほうをよく考えるわけです。

文化的とか、文化という定義がはっきりし

ないことにはなかなかむずかしいと思うんですけども、われわれの立場も実は林部先生と同じような社会教育的な立場で、参加するほうをみるわけなんです。

たとえばお祭りなんかでも文化だと思っているわけだし、むしろこういうものを引き継いでいくにしても、なんかお祭りというところから飲んできくというような概念があるわけ、それをそのまま引き継いでいくということに、一般的には非常に抵抗したいものがあるように思いますが、どうもお祭りに関しては、地方へまいますと創造性が乏しいように思うんです。万博とかオリンピック、これもお祭りですから、これなどは大変いいわけなんですけれども、地方へまいますと、そういう意味ではどうもあまり文化的な発見がないような気がするんです、これはひとつ青年が、今の若い人に受け入れられる形に開拓、創造していかなくちゃいけません。こういう考えでおるわけなんです。ですからたとえば郷土芸能を、文化財としてそのまま受け継いでいくということも、もちろん役割としてやらなければいけないけれども、同時に、それは昔からのものであって、青年が必ずしもそれを理解し、了

解をして、いいものだからやろうというのではなくて、むしろただ形だとかそういうものを受け継いでいこうというだけですから、求めるものとしてはだいぶ違うと思うわけです。

そういうことで、ぼく自身の立場は、いろんな専門的な見方ができないもんですから、青少年の文化活動の底辺を広げようという運動、それは参加する底辺もそうだし、あるいはそれを鑑賞する力をもつ層を広げるといいますか、そういうことを青年の活動の中でだいにしたらいいと思います。でないと、なかなか専門家の方がおっしゃるような、期待にこたえられる参加もできない。あるいは昔は昔は芝居、国定忠治あたりの芝居を見て、地域の人たち盛んに拍手をした。ところがもう今では、全国どこへ行っても、そんなことに拍手をするような地域の人たちもそれほどなくなりました。そうするとかなり鑑賞する力も出てきたんじゃないか。

これはそういう意味では、非常に地道で程度も低いわけなんですけれども、非常にだいいきな面じゃないか。とくにこれは教育的な、人生観的な観点から関係あるわけですから

んだという観客意識というんでしょうか、そういうものをやはり理解させないかね。おれたちが文化を創っていくんだという気持ち。だから観客の側に立って、一つのものを創るということ、参加しているということ、これがだいじだと思いますね。

森 そういう点では、ことに今の青少年は、感受性がとっても敏感になっていいますね。その意味では感受性のほうが、より一層敏感であって、りっぱであって、創作性とか表現力のほうがまだ少し問題があると思うんです。

その感受性のほうは、底辺を広げるという意味で、もっともっと数多く網の目を張り巡らして数多くいいものを見せる。やっぱりいいものということと同時に、数多くということも、とってもだいじだと思うんですよ。

友井 だから全国を廻れる青少年芸術劇場の定期公演などは、青少年のために非常に必要だと思うんです。

森 一回と二回とでは全然違うし、一回と五回では大変効果が違うわけです。数多くということが、いいものを、と同等ぐらいに必要なことだと思うんです。そうすると感受性

も、そういう青年達の活動というのは、意外に評価されない。たとえばマスコミあたりでも、地方へ行くとか新聞の地方版などになるわけですけれども、青年団はいいたい何していい。あんなことをやっていていい文化だと思ってるんだらうか。というような形で、郡とか町内でやっている活動に対して酷評を加えられる。目的が違うためにそういう批評もやむを得ないんですけれども、参加したり、鑑賞する力をつける底辺の拡大という意味では、もう少し育ててやるような空気……

。そういう底辺を広げていく、あるいは芸術というものの、文化というものに目ざめていく土壌を、初めからそれはだめだという形ですんでしまわれると、新しい芽が生まれてこないような気がして、そういう意味ではどう奥くてもいいから、やっている間に、(さっき先生がよくおっしゃったように)何か自分にそれが得になったんだと気がつく面もありますし、底辺活動といいますが、専門家教育じゃなくて、余暇の時間を利用した一つの文化的な活動といえますか、そういう底辺活動みたいなものをだいに育てるようなものを、住民全体で、とくに教育的な観点から心

の底辺というのがどんどん広がるし、それがやがては今栗原先生がおっしゃってくださったように、今度はわれわれ表現する側と一緒にあってよりいいものを創れると思うんです。

栗原 そういいものというものが、実は一定の中・小都市に限定されて、もっと小都市、農村部には全然それが浸透していません。ただわずかにテレビを通じて知るだけで、生のものを見るといいことはできない。われわれは今文化庁として、へき地の子どもたちに芝居を見せるということをやっていますけど、大体年間百か所回って……生まれて初めてそういう舞台を見たという子どもたちが多いんですね。

そういうように子どもたちからいいものを与えて、それに対するあこがれとか親しみとをもたせるようにしていかなければ、文化というものが都市的になって偏在してくると、もっとたくましい日本の文化——さっき底辺を広げるといわれましたが——底辺の広がりが薄れていくんじゃないかというように感じますけれどもね。

吉里 それはやっぱり芸術家の方々も努

掛けていかなければならんのではないかと思います。

芝居……文化……は「舞台」と「客席」で創ること

栗原 今のお話の中にたくさん問題が含まれていますが、たとえばさっきの創る側と見る側という分け方は私はよくないと思うんです。私たち芝居の世界では、芝居は舞台と客席で創る……ということばがあるんです。

そのように見るといえるのはただぼんやり見るんじゃないで、やはり創作に参加していることなんです。だから一国の文化が栄えていくというのは、そういうものを作り上げていく力があるから、いいのがどんどんできていくので、観客自身が全然それについていかなかったら、その国の文化は栄えない。いいオーケストラができるということは、いいオーケストラを味わえる観客ができていくから、一緒に作りあげていることだと思ふ。いい舞踊ができるということは、やっぱりその舞踊を愛する民衆がいるからで、今までのように、見る、創るということばを、ことばの上では分けるけど、実際は、われわれが参加している

力だけだいていられるけれども、そこで国の責任というのか、文化行政の責任というのがあるんで、私も役人が文化を創るわけでもなく、芸術をやるわけでもない。お手伝いはそこらへんにあると思うんです。だからこれは簡単なことばでいえば条件の整備でしようけれども、たとえば文化会館をうんとたくさん作ってやるのか、今でも相当できてはきておりますけれども、やっぱりまだ大都市ぐらいまではです。

それからもう一つ、林部さんにもご意見を承りたいんですけど、公民館の活用ということばを文化行政としても考えていくべきであると思ってるんです。と同時に、高い料金で見せるのではなくて、やっぱりおこずかいの中から若干苦勞すれば見れるという程度のものでしてさしあげなくちゃいかんと実は思っているんです。これは杉本さんのお話を聞いて、非常に恥ずかしかったんですが、謙虚におっしゃっているけれども、われわれの行政としての足らざる点を指摘されているわけです。この辺は私も考えなくちゃいかんだらうと思いますね。

栗原 その辺でひとつ攻撃してみたらどう

でしようかね。おまえたちいったい何してるんだってね。(笑)

今部長のおっしゃったことはわれわれを置き換えてもいいようもんで、そのとおりです。

吉里 雑談ですと、芸術家の方々もご努力いただかなくちゃならんが……、とういうところなんですが……(笑)

友井 だからプランをどんどん作ってもらって、こういうところへも行け、ああいうところへも行けと言っていただければ、私たちはほんとうに積極的に音楽であれ、バレエであれ、演劇であれ参加したい。みんな気持はそうですよ。

吉里 それはやっぱり芸術は芸術家のものであると同時に、国民のものでなくちゃならないのでしょね。

栗原 国民のものということね、文化庁以外の役所は全然考えていないからこういうことになるんですよ。

吉里 申しわけありません。

栗原 ああいう無形のものに対する尊敬と……、それが国をどんなに豊かにするかというところを知らなければいかんのですよ。

に限らないわけですが、少し間尺に合わないような感じになっているんです。

ですから、まず何かをやるうという、話を始める集会をする場が喫茶店であったり、個人の家であったり、時間が許される旅館へ行って話が始まったりでは、やっぱり健全じゃないと……。もっとちゃんとしたところでも時間は十分であるというような施設がもっとないと、それこそいいものが生まれてこないんじゃないかという気がちょっとします。勤労青年が比較的自由に利用出来る施設のあるところでは、その施設を拠点に数多くの文化的サークルやグループが生まれ、活発に活動を続けている例は全国各地で数多く見られます。

吉里 今のご議論とかご意見は、私のほうで、毎年全国各地の文化振興会議というのをやっているわけですよ。栗原先生にも何べんも出ていただいておりますが、そこで毎年出る意見です。たとえば、これはいろんな事情があると思うけれども、六時になった文化会館のかぎが閉まっちゃうとか、あるいは公民館のかぎが閉まっちゃうという話がある。これは、そういう施設というのは、普

吉里 私ども非常に恐縮に思っていますが、

青少年芸術劇場で森先生に行ってもらって解説をやってもらう。あるいは栗原さんに解説をやってもらう。友井さんがやってくれるとか、そういうことをやってるんですがこれは芸術家の方々もそういう意欲はあるわけなんです。そういう場を作ってさしあげる。と同時に青少年に対しても、今後の文化というのは青少年が国民の側として創っていくものだから、未来の文化というのは、青少年にうんと期待できると思うんです。今のご意見のように、たとえば感受性というものは非常に強くなっているし、見る目というのは非常によくなっている。そこらへんを育てながら、高い文化を創る土台にもし、青少年も高いものを受けることによって高くなっていく。だからぼくは、芸術行政と文化行政は一応ねらいは違うけれど、それが一本になって初めて行政だと、仕事だと思ってるんです。そこら辺をひとつ考えなくちゃいかんだらうと思うんです。

今足りないのは、そういう一つのねらいを後ろに隠しておいていいが、ねらいをもっとわれわれがはっきりしなければいけない。後

通のお役所流のやり方ではサービスができないと思うんです。そこら辺は行政としても考えなくちゃいかんが、問題は地域住民の要請が、最近是非常に端的に強くなってきて、それによって公害問題もある程度いい方向に向きつつあるというんで、遠慮する必要はない。そういう活動を通じての要望というのをどんどんぶつけて、それをわれわれがいろんな形で徹底していくという姿勢をとりたいと思ってるんです。今出ましたから言い訳がましいんですけど、そういうことを考えているところでございます。森先生あと時間がないので何か最後に……。

優れた芸術を数多く観せること

森 私自身もひっくり返るめてそうなんですが、年をとっているわれわれは、現在文化的教養そのものは、今の青少年よりはもっていることは事実でしょうけれど、私考えるのに文化的素養というか、素質というのは、今の青少年のほうが我々よりも数等すぐれたものをもっていると思うんです。比べものにならないくらい、本質的に違うくらいにすぐれた

ろに隠しながらやっていく。そこが普通の学校教育と違うところだと思っんですよ。ほんとうの、深味のある教育というのはそこへんしか出ないんだらうと思っんです。

青少年の文化活動と文化施設

杉本 少し話が出かかったんですが、これは文化庁の分野ではなく、むしろ文部省の分野のほうが強いのと思っんですが、いわゆる施設ですね。これはたくさんあります。いなかのほうでも公民館もかなり充実してまいりましたし、県立だとか公立の施設もあります。が運用ですね。とくに学校でいろんなことをやられる場合はまだいいんですけども、勤労青年がいろんな文化サークルの活動をやられるときに、仕事をもっておりまうから、それを終わったあとでいろんなことをやるということになると、かなり時間的な制約がある。ところが公立の施設というのは、時間的な制約が非常にきつくて、若い人の要求が満たされなない。使いづらい。これはもう少し若い人を信頼というか信用して、施設の運用などはよく考えてくださったら(とくにこれは文化活動

ものをもっていると思っんです。これに対しては、われわれ謙虚な気持ちでそれに対さなければいけないと思います。

それからもう一つは、さっき申しあげた、いくらい仕事でも数が少なければ、ほんとうに何にもならないということです。そのときそのときで雲散霧消しちゃうわけですよ。だから物量攻勢だか知りませんが、数多くということとワーストと広めていかなければ、せっかくのいい仕事、そのたびそのたびに失わなくて消えちゃうんですね。

友井 忘れたところにやってくるというんじゃないかな。

森 ええ。そして今の青少年は、いろんな面でも物事に積極的です。だからこういう問題についても、われわれがその青少年を上回る積極性をもって対していかなないと、教育性も指導性も何にも意義をなさないと思っんです。だから青少年を上回る積極性と同時に、青少年の素養に対する謙虚な気持ちをもって、それでどこかにきびしさをピットもっていたいなあと自分自身思っているのがなかなかうまくいかないんですけれども、常日ごろそんなことを考えているもんで

すから。

吉里 ありがとうございました。今も言われたように、おとなから考えると、まさに青少年というのは未完成なんですね。しかし未完成であるからこそ青少年だと思ふんです。と同時に、可能性があるわけですから、その辺われわれが、最近の若い者は、ということばで言ってしまうので、われわれもそうだったと思ふんですけれども、ひとつ理解を示しながらおとなの責任としての指導ということも必要だと思ふんです。

栗原 その点から展望ということですね。

文化行政、社会教育行政の役割

林部 私は青少年の可能性の観点から考えるんですが、さっきお話がございました、青少年の文化活動、芸術活動を盛んにするためには、行政の役割が非常に重要である、とだから文化行政の方でもどんなやっていただきたいし、また、社会活動もこれにタイアップしなければいけない。社会教育の方では、たとえば、地域の社会教育センターである。公民館なんかもうんというのを作りまし

て、そこで快適に練習でもなんでもできるようにしたい。

ただ行政には限界があると思ふんです。社会教育の面では、行政がやる社会教育なんていうものは、全体の社会教育の中のほんの一部分に過ぎない。大部分は、個人の学習や、民間団体の活動ですね。あるいは他の行政がやっているいろんな学習的な活動である。他の行政が今教育活動を非常にやっているんですよ。そういういろいろなものがあるので、その中で、純粹に社会教育行政がやる分野というのは知れたものだ。知れたものだけど、それすらできないという自己反省はあるんです。それはまあ別に置くとしたしましても、そういう中で、文化活動のこれからの展望として、青少年の可能性をうんと引き出すためには、何か民間なりあるいは一般の住民なり国民なりの積極的なエネルギーが必要である。そのエネルギーをどう引き出し燃焼させるかが問題ですね。

栗原 私は行政という場合には、おとなとか役所とか、そういうところから考えたことを、直線的に末端にいかせようとするところに無理があると思ふんです。行政の結果とい

うのは、民衆がその中で生きていく場を作ることですから。(場というのは建物的なことではなくて、いろんな活動をする) そうするとやはり若者が何を望んでいるか、青少年が何を期待しているかという掘り下げがなくなっちゃいけない。

たとえば、公民館問題でもお願いしていたんですが、大体公民館とは何事ですか。あの名前聞いただけで、おっかなくて、教えらるみたいなことで、いかにも形式的な名称ですね。だからよその国へ行っても、役所は公民館的な条例でやって、それには「星の家」とか「若者の家」とか、「音楽の家」とか、そんなふうに自分たちがそこに集まるような場合のニックネームついたりして、自分たちのものとしている。

公民館に集まれなんていうと、また何かおこられるんじゃないかと、あるいはまたハイハイって聞かなくちゃならないとかね。

林部 栗原さんは被害者意識が固まっているようだが、公民館はすべてそうではない。実にすばらしい活動をしているものも近頃どんどんできています。われわれはそれを問題にしているのです。

栗原 市民的なものにするためには、もう少しそういうニックネームつけてもいいでしょう。今は新幹線でも「ひかり」とか「こだま」とか名前つけて親しもうとする。ただ名前だけの問題でなくて、そういう姿勢の中に青年たちがよらない面が一つあるんじゃないだろうか。それから森さんが非常にいいことおっしゃったんですが、今の若い人たちは非常に感受性に富んでいる。しかし感受性に富んで何かを表現しようとしても、必ず壁にぶつかるときに、それをいったいだれが指導しているか。現状ではほとんどの場合、学校の先生たちがしているんです。ところが教育者というのは、学校教育だけで手いっぱいなんです。それをまた社会生活の中の教師ということとで引張り出すのは非常に困難だから、われわれは百年の大計を立てる意味では、そういう指導者を養成していかなければいけない。たとえば今の政府は、無医村のために医者や学校を作ろうとする。肉体の学校を作ったら精神の学校を作らなくちゃいかなと思ふ。肉体の面を恐れるから、形としてどんな新しい医者を作って、そこに補いを与えようとしている。それじゃ心の荒廃の問題はど

うするかといったら、やはり私は心の面のほうにも配慮することが政治だと思ふ。そういうところから、どんなに分け入っていくような指導者を作らなければ、いつまでたっても、戦後からいくたび指導者がいない指導者がいないと言われて、それは何とかあなただとか、これは実にいい加減なことばであって、もうそういう時代ではなく、具体的に指導することが必要なんです。指導ということとは、なにも芝居の演出をやれとか、踊りの振り付けをやれというのではなくて、その人たちが、文化的方向に何か指向しようとする心をうまくとらえてやって、おまえはこうやったらいいんじゃないかという、相談相手になるような意味の指導者でけっこうだから、そういう指導者の養成というのがこれからは必要になってくるんじゃないだろうか、と思ひます。

そういうふうな、物心両面の助けが、もっと積極的になれば、やはり今悩んでいるような問題が、将来もっと大きな形で来るんじゃないか。戦前、戦時中、戦後を通して、今の若者たちが非常に豊かになっているとすれ

ば、もう十年、二十年先になったら、またある意味の豊かさがもどってくる。それを野放しにするのでなくて、それをどこまで広げていくか。さっき私は、まだ青年の文化活動や芸術的活動というのは、趣味だとか娯楽にとどまっているんじゃないかと言いました。一番最初に言ったのはそれを家庭生活の中に、社会生活の中に、価値として還元する。そのとき初めて文化運動になるから、そういうふうな芽を開かせるように、また一応われわれが相談相手なり指導者に望むときには、そういう方向に引きずっていくように希望したい。私たちは芸術活動をそこでやるんじゃないかと、よりよい社会人になるために、芸術的方法において彼らを指導するんだという、その辺の区別もはっきりさせておかなきゃ、青少年の文化がよりよくなっていくとは思えませんですね。

吉里 あんまり時間がありませんから、あと友井先生からちょっと。

マスコミに望むこと

友井 そうですね。私も前々から思ってい

るんですけれど、結局は森先生がおっしゃったように、非常に感受性が強くなっているということには、いいことに對する感受性も強くなっているかわりに、悪いことにも非常に敏感に反応しやすいし、またそれに影響されやすいということ。だからまじめな番組は別として、チャンネル一つひねっても、非常に全国総白痴化をねらっているような、（たまに笑って見てるのはいいですけど）それをしよっちゅう見ているのなら、青少年がそういうことに影響されつつある、虫ばまれつつあるということも事実ですから、ああいうこともやはり教育の一環として、ある程度規制できるような面は規制していかなくちゃならないんじゃないか、と。

いくら商業ベースに乗った番組だからといっても、中にはあまりにもひどいと思われるものもあるでしょうし、そういう点でも、私はいつも大変悲しく思っているんです。

それとアメリカの例を見るまでもなく、日本も世界の経済界をアンパランスに導くほどの経済成長を示しているんですけれども、その反面、やっぱり心の成長ということがおさなりにされてると、これは大きな問題だと思

うんです。このままいけば心を見失った若者たちが右往左往して、青少年の犯罪がより多くなっていく可能性は多分にあるわけですよ。だから非常に敏感になって可能性があるという反面には、その裏の悪い方の可能性をも考えなくちゃならないと思います。

生産へつながる文化活動を

杉本 やっぱり生産につながるような文化活動、今は消費的な文化活動（今先生おっしゃったことと同じようなことになるんですが）があまりにも多すぎるような感じなんです。今無形文化財とされている郷土芸能などというものは、やはり過去において生産の喜びだとか、生産につながっていた。だからこそ今も価値があるんだと思うんです。

そういう意味で素朴でもいいからわれわれは新しい時代のお祭りを考えたいというので、やはりそのことが生産につながるような形のものを、ただせつな的にパッとやって、楽しければそれでいい、それで終わればいいというんじゃないくて、何か新しい生産への意欲につながるような、そんな文化活動の底辺

を広げたい。これはそんなはなばなしのものじゃないと思うんです。非常にじみで地道な努力、根気がいると思うんですけれども、これはだれがやらなければいかんというものでもない、全部がやらなきゃいかんわけですけども、何か生産につながるような文化のふんいきというものを作りたい。そんな活動につながった日常活動といいますが、底辺活動といいますが、これは私たちの立場で考えているわけです。

心のゆとりこそ大切

林部 私ひとこと。今日、文化活動、芸術活動といいますが、このようなせわしい、非常に緊張したわれわれの生活、これは物理的な時間の上ばかりじゃなくて、心も非常にせわしくて落ち着かないような現実の中からは、いいものが生れてこないと思うんです。この多忙さを何とかしてゆとりをもたせるようにしないと、芸術活動、文化活動といってもほんとうのものは出て来ないというような気がします。したがって文化活動、芸術活動も、国民全体

の生活改善を通して、その中から、ゆとりを発見するという心構えを持たなければ、すくすくと伸びないと思う。何とか非常に忙しいそのときに、ちょっと立ち止まって、間を置いてわれわれの生活を見ていくという生活態度がないと、文化活動、芸術活動は伸びない。そういう心のゆとりというものを、われわれは身につけて、これからいろんな意味において持つべきではないかという気がいたします。

吉里 きょうはお忙しい方にお集まりいただきまして、いろんな角度からの問題が出てきて非常に幸いでございました。

本日のお話の中から、読者が自分なりに問題を引き出し、解決の方向を探求するというところで座談会の意味があるだろうと思えます。

だれのことばですかわかりませんが、「科学は人に命令するが、芸術は人をなごませる」というのがあったと思います。そういう意味で、目的としてでも、手段としてでも、あるいは媒体としてでも、芸術なり文化というものを通じて人間が豊かになっていくということはいえると思うのです。いろいろと青

少年に期待することも多いのですが、文化活動の面に對する期待も大きくもちながら、豊かな日本の将来を築いて参るために諸先生方の活躍をお願いして、この座談会を終わらせていただきたいと思います。



札幌オリンピック冬季大会の意義と

国民スポーツの振興

栗本 義彦

オリンピックとアマチュア問題

鈴木 良徳

学校における冬季スポーツの指導

丹内 正一

冬季スポーツの振興計画

今井 政夫

札幌オリンピック冬季大会と

国際理解の教育

高橋 喜敬

札幌オリンピック冬季大会の概要と特徴

望月 健一

〔現地ルポ〕

——札幌オリンピック大会を迎えるにあたって——

(1)施設の特徴

小玉 昌俊

(2)大会を盛り上げる人々

佐藤 隆次

(3)日本選手の実力

盛合 力

(4)学校や市民が大会をどうするか

村田 吉雄

◇秋は文化の日を中心として教育・文化に関する行事が全国的に実施されております。文化勲章の授賞、文化功労者の顕彰を始め教育・文化に功労のあった人、優良な施設の表彰など各種の行事を催して教育・文化に關して国民の理解と関心を深めようとするものであります。また、最近の経済成長と技術革新の発展により尊い文化財が破壊されるに伴ない人間疎外、公害などの現象が次第に人間の心の豊かさまでも奪いつつあり、芸術・文化の振興こそ失なわれる人間性を回復させるものではないでしようか。

◇本号では芸術・文化を特集し、「青少年と文化」をテーマに青少年にスポットをあててみました。巻頭では大島先生に青少年と文化について述べていただき、現代青少年の現状と題して、文化活動の現状と展望と題して、文化活動に何を求めているかなどを話しあっていたいただきました。また浅利先生を始め諸先生に青少年を中心に論じていただきました。

第1133号

11月号

「文部時報」

月刊

MEJ 5133

文 部 省

昭和46年11月5日 印刷
昭和46年11月10日 発行

著作権
所 有

発行所 株式会社 帝国地方行政学会
本 社 東京都中央区銀座7丁目4番12号
(郵便番号 104)
(営業所) 東京都新宿区西五軒町52番地
(郵便番号 162)
電話 東京(268)2141(代表)
振替口座東京 161番
印刷所 株式会社 行政学会印刷所

定価 80円(〒20円)
年間購読料 960円

* ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申し受けます。
* なお、購読の申し込みは、直接営業所またはもよりの書店にお願いします。